

多様な住民のつながりと出番づくり

～事例で学ぶ住民流の地域共生社会～

齋藤 征人

(北海道教育大学教育学部函館校国際地域学科 教授)

令和5年度（2023年度）福祉のまちづくりフォーラム（地域ケア全体会議）

- 日時 2024年3月19日（火）13：30～16：00
- 場所 プレミアホテルCABIN PRESIDENT函館
- 主催 函館市

プロフィール



齋藤 征人（さいとう まさと）

- 宗谷管内枝幸町生まれ。函館～旧上磯町で育つ。
- 民間企業～大学・短大（教員）～障がい者施設（支援員）～廃校跡施設の再生プロジェクト（地域支え合い体制づくり拠点事業コーディネーター）を経て、2014年から現職。社会福祉士。
- 専門は、ソーシャルワーク・地域福祉。

- 函館市地域包括支援センター運営協議会 会長（2021年～現在）
- 北斗市北斗市総合戦略検討・推進会議 会長（2020年～現在）
- 北斗市地域公共交通活性化協議会 会長（2020年～現在）
- 福祉コミュニティエリア整備事業（生涯活躍のまち形成事業）地域再生協議会 会長（2016年～現在）

- これまでに、江差町、厚沢部町、八雲町、長万部町、松前町、浦臼町、上士幌町などで生活支援体制整備事業の支援にかかわる（アドバイザーなど）ほか

地域共生社会の背景にあるもの

- 高齢化や人口減少が進み、地域・家庭・職場という人々の生活領域における支え合いの基盤が弱まってきている。暮らしにおける人と人とのつながりが弱まる中、これを再構築することで、人生における様々な困難に直面した場合でも、誰もが役割を持ち、お互いが配慮し存在を認め合い、そして時に支え合うことで、孤立せずにその人らしい生活を送ることができるような社会としていくことが求められている。
- 「地域共生社会」とは、社会構造の変化や人々の暮らしの変化を踏まえ、制度・分野ごとの「縦割り」や、「支え手」「受け手」という関係を超えて、地域住民や地域の多様な主体が参画し、人と人、人と資源が世代や分野を超えつながることで、住民一人ひとりの暮らしと生きがい、地域をともに創っていく社会を目指している。

地域共生社会の実現にむけて

- 多様性（ダイバーシティ）は、地域共生社会実現のカギの一つ。多様な特徴（得意・不得意）を持った人々の共感の輪は、支え合える可能性を拡張する。支え合いの仕組みのエンジン部分として、健康づくり・実践的な学びのツールとして、住民主体の活動に期待があつまっている。



北海道胆振東部地震から 見えてくるもの

生活に「困った」経験から

震災後の厚真町



倒壊した建物が道路脇に横たわっていました。



今も全国にはたくさんの仮設住宅に暮らす人たちがおり、自然災害とどう向き合っていくか、またそれへの備えは、私たち共通の課題です。

障がい者 や 高齢者 ≠ 災害弱者

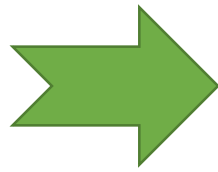
- いざというときに周囲からの支援と結びつかない結果として脆弱化。
- 「高齢や障害がある」という個人の側の要因以上に、「いざという時に助けに来てくれる人がいるかどうか」という周囲の環境の応答性や関係性が、災害脆弱性を決める。

地域における人と人とのつながりで包摂することにより、命や生活を支える取り組みをより積極的に進めるべき。

出所：立木茂雄（2014）「災害ソーシャルワークとは何か」『月刊福祉』2014, March, 33-38.

現代の社会福祉の主たる対象

救 貧
・
防 貧



つ な が り の
再 構 築 へ

出所：中土純子（2017）「生活困窮者自立支援制度とソーシャルワークの在り方に関する一考察」『学苑・人間社会学部紀要』916, 82-91.

生活ニーズ調査の試み

調査報告書「ダイジェスト版」より

大学周辺地域で生活ニーズ調査

朝日新聞 (2015年3月25日北海道面)

高齢者・若者、地域で「互助」 道教大函館校、住民とニーズ調査



調査の打ち合わせをする齋藤征人准教授
(右)と学生たち＝函館市の道教大函館校

地域に住む人たちの「困りごと」を調査し、高齢者や障害者、若者たちがお互いに行えることをサポートし合う地域づくりをめざして、北海道教育大函館校の齋藤征人准教授(39)と学生、地域の人々がチームをつくり、住民のニーズについて調査を始めた。結果をもとに、人と人がつながった「互助の態勢」を築いていきたいという。

1月に結成された「地域の健康暮らしを考えるプロジェクト・チーム」(代表・齋藤准教授)で、メンバーには医療や介護の専門知識を持つ保健師らも加わっている。調査は、大学周辺の中学校の学区を中心に、学生らが自宅を訪問する方法で1次から3次まで行う予定。高齢者の比率など函館市の人口構成にも配慮して、様

々な人を対象に実施する。少なくとも50人程度から聞き取りしたいという。

1次調査では、世帯の構成や通院・買い物手段、食事は誰が作るか、外出の頻度、1日に平均何人と会うか、日中の過ごし方、ほかの人にしてあげられることなどを聞いた。

2、3次調査では、内容をさらに深めることを検討。秋に結果をまとめ、高齢者や若者らが必要としていることを互いに支援し合える活動につなげたい考えだ。他地域での態勢づくりにも参考になりそうだ。

齋藤准教授は「お年寄りがいっばいいて地域が疲弊するのではなくて、安心して暮らせる地域を、まずは住民自身がつくる仕組みづくりをめざしたい」と話している。

(泉賢司)

調査目的・対象

1. 目的

- 地域住民の日常生活上の困りごとと、ボランティア活動等の多様な市民活動とのマッチングの可能性を探るとともに、学生を含む地域住民同士が互いに日常生活の支えになり合うための機会や、各種福祉・文化団体の活動のあり方を検討するために行います。

2. 対象地域及び対象者

- 大学周辺地域（旧五稜中学校区及びその近隣地域）に居住する地域住民。計58名（1次調査+2次調査の延べ数）。

3. 調査担当者

- 北海道教育大学函館校の学生と地域住民有志による共同研究

調査から見えてきたこと（1）

「地域協働」した本調査の意義

- この調査は、函館市内とはいえ限られた地域に暮らすのべ60人程度にしか調査が実施できていないため、数量的に「多い」「少ない」で、住民のニーズやその傾向を判断できない結果となっています。ただ、調査そのものが地域住民同士をつないだり、地域について考えるきっかけになったりしたことや、特定の属性の住民ではなく多様な層の住民が、共通のテーマについて考えることにつながったことは、ささやかな本調査の意義だと感じています。

- 地域と協働する何か

調査から見えてきたこと（2）

住民の親切さも「豊かさ」

- 調査地域の住民の多くは、現在の地域生活に概ね満足して暮らしており、**恵まれた地域環境・資源のみならず「住民の親切さ」もその豊かさを支持している**ようでした。ただ、「近所づきあいや地域内での交流」のための場所やイベントに関する情報と、住民とのマッチングには課題がありそうです。そのため、住民たちが利用しやすいと感じるエリア内に、多様な住民や情報の交流拠点や市民活動の拠点があって、世代を超えた共通のニーズである買い物や食事の支援などもできるとしたら、利用者の多様性と利便性、デジタル・アナログ双方の情報の拡散と、世代間交流をも確保できる可能性があります。
- 人と情報の交差点

調査から見えてきたこと（3）

担い手不足ではなく、仕掛け不足

- また、無理なくできることで住民同士が互いに支え合える関係づくりへの意識改革や、住民ニーズと町内会活動のマッチングについても今後の大きな課題です。ただ、喫茶や見守り・声かけ・御用聞きなどについては住民の協力が得られやすい分野でもありそうなので、**住民が負担を感じず楽しみながらできる分野から「出番」を開発していくこと、それへの対価についても柔軟であること（有償ボランティアを含む）**が、これからの市民活動支援には求められそうです。市民活動の担い手はまだまだ地域に眠っており、必要なのは新たな担い手・後継者ではなく、多様な「出番」や「仕掛け」であり、それをコーディネートする人材といえそうです。

- 出番と仕掛け

調査から見えてきたこと（４）

有機的コラボレーションと地域協働

- 調査地域は地域資源に比較的恵まられ、喫茶店や食堂、商店やコンビニ「中福た医異」
スーパーストーン×町内会による「喫茶店×高働店ちづ」
が、療養施設・福祉による「喫茶店×高働店ちづ」
業種による新たな価値や魅力的な地域コミュニティを
力にかけて新たな価値や魅力的な地域コミュニティを
ありそうです。

- 多様なコラボ

多様な住民のつながりづくり

行政の支援をあてにしない地域活動の魅力

サロン活動のいろいろ

学 習 型

ボランティア活動や防災、
終活など学びを通じた交流

交 流 型

レクリエーションや互いの
趣味活動を通じた交流

イベント型

地域のごみ拾い、草取り、
子ども食堂等を通じた交流

交流のきっかけづくり



食を通じた交流



スポーツを通じた交流



音楽を通じた交流

芸術・スポーツ系は多様な人を巻き込みやすい

たまりばの手法

利用者とボランティアへのヒアリングから



▲学生との交流（かあちゃん食堂たまりば）

江差町の概要

- 江差町は北海道の南西部に位置し、函館から車で2時間程の、日本海に面した町です。北海道文化発祥の地といわれ、鷗（かもめ）島は有名。
- 人口は約7千人。65歳以上の人口割合は40%程度。
- 主な産業は、農業、林業、水産業などで、かつてはニシン漁に賑わった港町として知られている。



かあちゃん食堂たまりば

- 2005年9月に開設。100年近く続いた老舗の酒屋内で始まった。
- 民生委員をしていた酒屋店主の妻（現在の「たまりば」店主）が一人暮らしの高齢者の外出機会の一つとして考案。
- 安価で食事を提供することで、食を通じた住民の外出・交流機会として、酒屋の廃業をきっかけに空き店舗部分を食堂として開放。
- 営業時間は、毎週水曜日の2時間限定で1メニューのみ。1食400円でおふくろの味が食べられる。
- 1日の利用者数は30～50人。町外からの利用者も少なくない。



▲▼ある日の定食（かあちゃん食堂たまりば）



はじまりは「信念」と勢い

- 民生委員としての「市場調査」

「昔みたいに上がりこんで集まる場所がない」と、民生委員として住民宅を訪問した経験が住民の実情とニーズの把握になった。

- 商売人の「発想」

食材を地域の商店街から買うなど酒屋や魚屋など自営業としての経験が活かされた。

- やるときは「勢い」

「赤字になったらどうする？」「誰が責任取る？」などできない理由を重ねない。やってみなければわからない。地域に必要な資源をどうしたら創出できるかを考える。

- ぶれない「信念」

民生委員として経験に裏付けられた信念の存在。

運営は「臨機応変」

- モデルは「大衆食堂」

かつての大衆食堂が、ボランティアや利用者共通のイメージに。「大衆食堂では季節のものが出てくる。ごはんで季節を感じられる」という。

- 行き当たりばったり

無理せず臨機応変な運営をすることが活動の続けやすさになり、かつマンネリ化も防ぐ。「やっている方が楽しくないとできない。負担感はない。できないときにはやらない」のが長続きの秘訣。

- 400円で成り立たせるための「臨時営業」

ボランティアが無理なく活動できる範囲で、地域住民のニーズにこたえる「臨時営業」することで、安価での「通常営業」を実現。「お客さんが海苔巻き食べたいって言うと、いつやるかな…とタイミングを見て作る」という。

信頼される「殿様商売」

- 善意を気楽に受ける

地域住民の食を支える側である「たまりば」は、地域住民に支えられながら活動継続できている、まさに「持ちつ持たれつ」。支えられる側が支える側にもなれることで、自尊心の低下を防いでいる。「野菜とかは結構もらう。使ってちょうだいと」「漁師の人は昆布とかわかめとか持って来てくれるし。そういう寄附は気楽にもらう」という。

- 殿様商売

「たまりば」のボランティアの信念に共感する住民が自然と集まる（行政サービスと異なり、ときとして利用者も「選ばれる」）。「たまりば」も住民らによって絶えず吟味される。「殿様が商売やっている。お客さんは殿様に合わせている」「お客さんがこの人たちにサービスしているようなものだ。お互いなんだ」と評する住民も。

「住民流」のまちづくり

- 多様な人との出会い

毎回30人くらいは昔から住んでいる住民。他には勤め人も来店。ギター教室の先生、整骨院の経営者、パン屋、役場職員など、多様な住民が利用することが「たまり場」のおもしろさに。

- 情報の集約点

世界の情報はテレビやインターネットでわかるが、隣近所の情報はここにこないとわからないという住民も。2週間ぶりに喋ったという住民が「ああ、さっぱりした！」と帰る。

- 住民流のコミュニティ再生

最初は知らないもの同士だが、次第になんとかわかってきて、やがて顔見知りになる。偶然の出会い～馴染みの関係～共感できる仲間への関係が進展し、支え合えるコミュニティが形成されつつある。

「ユルさ」と「お互いさま」の魅力

- 住民意識の高さ

信念に共感する住民によって受け入れられ、活動自体も支援されている。地域にとっても価値を評価する住民意識の高さ。

- 「弱み」が魅力に

ワンメニューで週1回2時間程度の営業というマンネリ化しやすい活動の弱点を特長に。週1回営業だからこそできる、手間暇かけた下ごしらえ、季節感のあるおふくろの味。

- 「殿様が商売をやっている」

住民や家族との信頼関係がさらなる利用や協力につながり、新たな互助のコミュニティを形成している。行政にはなし得ない、住民流のまちづくりの魅力。

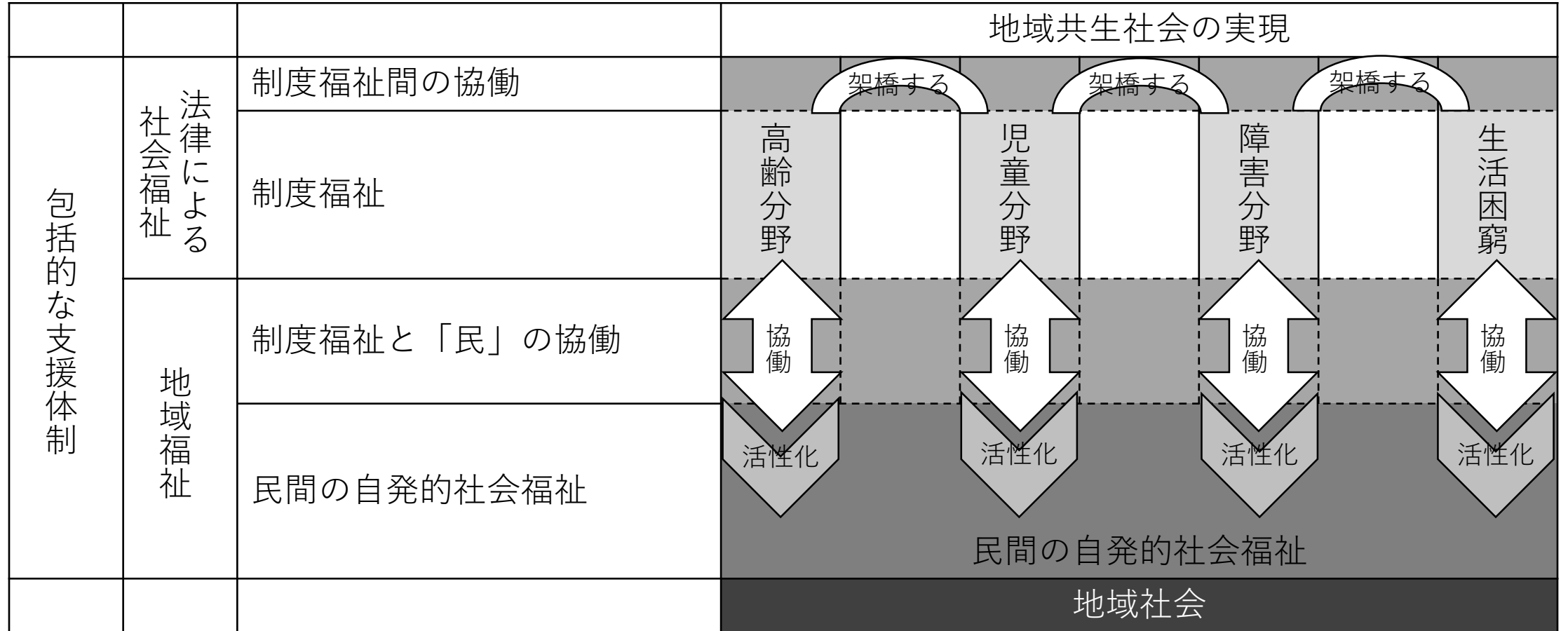


▲ふれあい食堂いこい（北斗市）への訪問

住民流の地域共生社会づくり

住民のエンパワメントを促進するために私たちができること

分野間の架橋と地域福祉との協働



参考：永田祐（2021）『包括的支援体制のガバナンス』有斐閣より引用し、一部改変。

住民のエンパワメントを促進する

- 常勤＋ボランティアの関係では得られない満足感

ボランティアの創意工夫が、利用する住民に喜ばれ、受け入れられることの喜び。マネジメントする側（常勤職員）＋ボランティアする側（実働部隊）という関係性をつくらない。

- 送迎する支援より魅力的な場であり続けること

隣近所の住民を誘ったり、相乗りをお願いしたり、食事の配膳を手伝うなど、住民同士で工夫しながら、通い続けたい場所であり続けることが、むしろ住民のエンパワメントを促進する。

- 支え続けられることはかなしい

支えられることはうれしいが、支えられる一方であり続けることはかなしい。利用者も支える側として活躍できる余地（仕掛け）も必要。

住民流の地域づくりを支える

- 地域づくりとは住民の力を引き出すこと

これまでの住民組織支援では「保健師が思うような組織にしたい」「保健師が持つ目標に向かって活動するような組織にしたい」などの思いがあったという。

地域づくりとは、誰かが作るものではなく、そこに暮らす住民の力を引き出し、組み立て、発展させていくこと。

- 行政や専門職は「黒子」

住民流の地域づくりでは、行政と異なりすべての住民に受け入れられなくてよい。魅力的な活動が住民主体で展開されていることがその意義。

人口減少が進むなか、身近な地域に貴重な資源（空き店舗や廃校等）が存在する。既存の地域資源を活用した地域づくりを。

地域共生社会への挑戦



- すべての住民の「**意識改革**」を

地域の問題を「自分ごと」に。まちづくりは人づくり！

- わがまちの「**戦略会議**」を

ニーズ調査とワークショップが「王道」。困り事のオープン化を！

- 住民参加は「**多様**」な層を

子どもたちの存在が「人」や「コミュニティ」を豊かにつなぐ！

- 本業主義とコラボで「**一石二鳥**」を

新しいこと・慣れないことを無理して始めるのではなく、既存の取り組みの延長・拡大（本業主義）や、有機的な連携（コラボ）による相乗効果で一石二鳥を狙う。Win-Win（双方に利がある）であることや、犠牲者を出さないことが長続きのポイント！

おわり

本日はご清聴ありがとうございました